『大鏡』における“うるはし”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4718

『大鏡』における〝うるはし〟

北村英子

「うるはし」はすでに『古事記』や『万葉集』にみられ、古くから存在する語であるが、他の形容詞の語彙は平安文学にみられる程多くはない。平安時代になると急に多種多様の形容詞が生まれ、育ち、隆盛を極め平安文学の中で活躍をみせる。その中の一つ「なまめかし」がある。この「なまめかし」が女性的であるのに対し、ここで取り上げる「うるはし」は男性的である。

本稿においては、平安時代の男性の作品である『大鏡』に表れる「うるはし」について、意味、用法等を考究する。

『大鏡』は周知のとおり、大宅世次（百五十歳）と夏山の重木（百四十歳）及び重木の妻と二十歳の生侍が加わって問答する。主として世次が歴史を語ると、他の三人が裏面を語ったり、相づちをうったりして対話するのを、そばで聞いていた者が書き綴るという形式をとっている。

こういった作品中に「うるはし」は、どのように用いられているか。意味、用法、称讃の内容等について検討する。

「うるはし」の用語例はおよそ十七例見当たる。それ等を逐次揚げながらみていく事にする。

○内裏焼けて度々造らせたまふに、円融院の御時のことなり、上（たくみ）ども、裏板どもを、いとうるはしく鉋（かな）かきてまかり出でつつ、またの朝にまゐりて見るに、昨日の裏板にもののすけて見ゆる所のありければ、[1]

この場面では、屋根裏に張り付ける板が、鉋で滑らかに削られている、その削ってある板を見て「うるはし」と称讃している。したがって、視点は板がとても上手に削られていることにある。一応、視覚で「見事だ」と捉えているが、「うるはし」に「いと」という語を上接させ、「うるはし」を強調し、最高の誉め言葉として用いられている。強いて言えば、大工達の極めて勝れた技量を指す。

このように検討してみると、ここの「うるはし」は「見事だ」と語釈するのが最も適切である。そして、腕前の勝れた人が人工的に作った物をいう。こういった例は、すでに、『源氏物語』にもみら

れる。

東の対どもなども、焼けて後、うるはしく新しくあらまほしきを、いよいよ磨きそへつつ、こまかにしつらはせたまふ。(2)

（宿木）

ここにおいても、焼失した後、建て直した建物の立派さを指す。したがって、「うるはし」は人工的に目的の物を作った場合、その出来栄えを称讃する際に用いる言葉である。

次は食器に関して使われた例である。

○御召物は、うるはしく御器などにもまゐり据ゑで、ただ御土器にて、台などもなく、折敷にとり据ゑつつぞまゐらせける。

「御器」とは、「蓋つきの椀」をいうが、それを「うるはし」と用いている。この「御器」は「御土器」すなわち、「素焼の器」に対して使われているところから考察すると、「蓋つきの椀」とは、食器の中でも本式な器を指す。したがって、「うるはし」は「正式に」と語釈するのが最も適切である。

本作品中には、この場面の他、食器について「うるはし」を用いている個所が見当たる。

○恵心の僧都の頭陀行せられける折に、京中こぞりて、いみじき御斎を設けつつまゐりしに、この宮には、うるはしくかねの御器どもうたせたまへりしかば、「かくてあまり見ぐるし」とて、僧都は乞食とどめたまひてき。

ここにも「かねの御器」を「うるはし」と称讃している。「銀の食器」を「うたせたまへりしかば」とあるところから、わざわざ鋳造させたもので、きっと立派な器であったにちがいない。したがって、「うるはし」は「立派だ」と語釈し、人工的に腕に縒をかけて作り上げた器を指す。

次は人物の心の状態に対して使われた例である。

○廂の大饗せさせたまひけるにも、横さまに据ゑまゐらせさせたまひけるこそ、年頃少しかたはらいたく思されける御心とけて、いかにかたみに心ゆかせたまへりけむと、御あはひめでたけれ。この殿の御心、まことにうるはしくおはしましける。皆人聞き知らしめしたることなり、申さじ。

「この殿の御心」を「うるはし」と称讃している。「この殿」とは、新大臣仲平のことである。仲平の心については、この他、「道長（雑々物語）」の部に次のようにみられる。

○枇杷殿をば、「あまり御心うるはしくすなほにて、へつらひ飾りたる小国にはおはぬ御相なり」と申す。

重木が語っている中に、高麗の相人が仲平の御心が「うるはしくすなほ」と言っていたとある。

このように仲平の心を二個所にわたって「うるはし」と誉めているのは、特に仲平の心の状態が勝れていることを表す。こういったことを鑑み、文脈に沿って「うるはし」の語義を考えると、「立派だ」と解するのがよさそうである。こういった人物の心情に関することに「うるはし」が用いられる例は、『源氏物語』にもみられる。

心やすく対面もあらざらむものから、人もかくのたまふ、いか

ならむ、坎日にもありけるを、もしたまさかに思ひゆるしたまはば、あしからむ、なほよからむことをこそ、とうるはしき心に思して、まづこの御返りを聞こえたまふ。（「夕霧」）

堅人と知られる夕霧の「きちんとした性格」を指し、男性の堅苦しい心の状態に対して、「うるはし」は用いられている。こういった例から、「うるはし」は視覚を対象とした物ばかりに使うものではなく、堅苦しい心情に対しても用いる言葉である。いずれにしても、堅い強い感じのするものが根底にある。

次は特殊な貴族の生活様式に関する例である。

○この宮の御腹の一の親王敦明親王とて、式部卿と申しし ほどに、長和五年正月二十九日、三条院おりさせたまへば、この式部卿、東宮にたたせたまひにき。御年二十三。ただし、道理あることと、皆人思ひ申しし ほどに、二年ばかりありて、いかが思し召しけむ、宮たちと申しし折、よろづに遊びならはせたまひて、うるはしき御有様いとくるしく、いかでかからでもあらばや、と思しなられて、

娍子皇后の第一皇子、敦明親王、式部卿が東宮にお立ちになったところ、気ままに遊び慣れていらっしゃったので、急に東宮としての生活を始めると窮屈なのである。この東宮としての生活に対して「うるはし」が用いられている。つまり、公式の格式張った生活を指す。「うるはしき（御有様）」を語釈すると、「格式のある（御生活）」となろう。最高位の年若い男性の公式生活の堅苦しさに対して用いられている。その生活とは言動面、教養面、身嗜みの面等すべてにわたって乱れることがなくかしこまっている生活をいう。

次は当時の生活用品の一つ、牛車に関する物に「うるはし」が用いられている例である。

○御随身・御前どもも、いかなることのおはしますぞと、御車のもとに近くまゐりたれば、御下簾うるはしくひき垂れて、御笏とりて、うつぶさせたまへる気色、いみじう人にかしこまり申させたまへるさまにておはします。

九条殿（師輔）の乗車している車は、高級車であるから、赤く染めた細い竹を緋の糸で編んだ蘇芳色の簾を掛け、その内側に蘇芳裾濃の下簾を垂らしているものと思われる。こういった明るい派手で美しい色合いの下簾が、乱れるところなく垂れている様子を「うるはし」と表しているが、このきちんとした垂らし方は、九条殿のかしこまっている心情に通ずる。つまりこの場合の「うるはし」は、高貴さを伴ない、乱れることがなく整っていて立派で堅苦しい雰囲気の中に出現する。そして、視覚で対象を捉えることの出来るものに対して用いられている。本文中の「うるはし」は「端正に（引き下ろされ）」と訳すのが最もよいようだ。

次は男性の晴れの儀の際に、身に付ける装飾具に対して用いられた例である。

○正月一日つけさせたまふべき魚袋のそこなはれたりければ、つくろはせたまふほど、まづ貞信公の御もとにまゐらせたまひて、「かうかうのことのはべれば、内に遅参」のよしを申させたまひければ、おほきおとど驚かせたまひて、年頃持たせたまへり

ける、取り出でさせたまひて、「やがて、あえものにも」とて奉らせたまふを、ことうるはしく松の枝につけさせたまへり。その御かしこまりのよろこびは、御心のおよばぬにしもおはしまさざらめど、

身分の高貴な殿（師輔）が正月一日に参内の正装につけるべき魚袋が破損したので、父君、太政大臣（忠平）の魚袋を頂戴するが、その魚袋は、「うるはしく」松の枝にお付けになっていた。と解することが出来よう。魚袋が松の枝に付いてる状態を「うるはし」と表現しているが、その魚袋とは、

儀式に際して、五位以上が右の腰（「石帯」の第一と第二の石の間）に垂れ下げ、腰の飾りとした魚形の符の袋。「公卿」は金、「殿上人」は銀。近世では長方形の木を白鮫の皮で包み、表裏に金、または銀の魚形を付けた。（『新選古語辞典新版　中田祝夫編　小学館）

このようにあるところから、太政大臣（忠平）が所有し師輔に与えた魚袋とは、金製の立派なものであったにちがいない。その金製の立派な魚袋が、長寿を象徴する木として、古来から尊ばれた松に付けられていたのは格式張って素晴しく見えたのであろう。こういった立派な魚袋は、高貴な身分の男性が、正月という晴れの日に参内し、内宴の晴れの儀式の正装時に付けられるものとして描かれている。したがって、晴れの日の儀式の際に、格式張った、堅苦しい雰囲気の場面の中に「うるはし」は出現している。そして、視覚で捉えた素晴しい様子に対して用いられ、あたりの雰囲気がなにもかも程度が高いという条件が関係している。

語義を文脈に沿って考えると、立派な魚袋を、松の枝に付けた状態が素晴しいと称讃しているのであろうから、ここの「うるはし」は「立派に」と解するのが最もよいように思える。最高の日に、最高の儀式に、最高の装束を纏った男性等が関係して、最高の誉め言葉として用いられている。

次の用例は高貴な身分の男性の儀式の際の態度に用いられている。

○御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会の御禊にこそ、いとうるはしくて、わたらせたまひにしか。「それは、人の目にあらはれて、九条殿なむ御うしろを抱きたてまつりて、御輿のうちにさぶらはせたまひける」とぞ、人申しし。げにうつつにても、いとただ人とは見えさせたまはざりしかば、ましておはしまさぬ後には、さやうに御まぼりにても添ひ申させたまひつらむ」

冷泉院に、御物の怪が憑いて、行幸を心配していたが、大嘗会の御禊の神事の際には、「うるはし」態度で行幸あそばされたのである。つまり、御物の怪が憑いている時は、心身共に乱れ不調であったが、体調が整って立派な態度で行幸なさるのである。最高位の身分の男性が格式高い儀式の際の態度である。それは堅苦しい雰囲気の中にある。したがって、「うるはし」は「立派だ」という意味で、最高の度合の場合に用いる。

次は前用例に続く文である。

侍「さらば、元方卿・桓算供奉をぞ、逐ひのけさせたまふべき

な」

世次「それはまた、しかるべき前の世の御報にこそおはしましけめ。さるは、御心いとうるはしくて、世の政かしこくせさせたまひつべかりしかば、世間にいみじうあたらしきことにぞ申すめりし。

世次の言葉の中に、九条殿（師輔）の御心を「うるはし」と称讃している。ここにおいても最高位の男性の生前の御心、すなわち、気立てが特に勝れていることを指す。心の状態が勝れていることを「うるはし」という言葉で称讃することは、すでに、「この殿の御心、まことにうるはしくおはしましける」・「あまり御心うるはしくすなほにて」と仲平の心の状態の立派さに対して用いられている例があるが、これについては前に述べたとおりである。ここにおいては、「うるはし」を「立派だ」と訳すと、「うるはし」に続く文、「世の政かしこくせさせたまひつべかりしかば」とあり、「かしこく」を文脈上、「立派に」とか「素晴しく」というように訳すのが、より適切だと考えると、「立派」という意味が重複する関係上、その重複の意味を避けたいがため、「うるはし」は「端麗」と語釈するのが最も相応しいように思う。つまり、九条殿（師輔）の心の内が、整ってきれいな状態をいう。「端麗」な心というのは広範囲に考えると、「立派である」・「見事である」・「曲っていない」・「几帳面だ」・「整っていて美しい」・「端正である」というような内容がすべて包含されたきれいな美質心情である。こういった美質心情は、九条殿（師輔）という最高位の男性の心の中に存在している。そして、それは高貴な雰囲気を伴って出現する言葉である。堅苦しい、格式張った場合に用いられるのも、ここでも同じ用法である。

次もまた、高貴な男性に用いられた例である。

○この殿は、御かたちのありがたく、末の世にもさる人や出でおはしましがたからむとまでこそ見たまへしか。……（略）……。御兄の少将も、いとよくおはしまし き。この弟殿はかくあまりにうるはしくおはせしを、もどきて、少し勇幹にあしき人にてぞおはせし。

御兄君（挙賢）と御弟殿（義孝）の容姿の美しさを対比して、御弟殿の容姿の美しさの方を「うるはし」と讃美している。御兄君の方も、たいそうきれいな人であったが、少し勇ましく荒々しい面があるのに対して、御弟殿の方の容姿は、一際引き立って、稀にみる端麗な美しさを讃美している。こういった御両人の容姿は、御心からにじみ出た人柄を伴った容姿である。

このようにみてくると、御弟殿の誉め言葉、「うるはし」を現代語に置き換えてみると、「容姿端麗」という言葉があるように、ここにおいても、「端麗」と語釈するのが最も適切のように思われ、視覚的に捉えた美的感覚をいい、身分的にも最高位の立派な男性に対して用いられている。

では、次の用例をみていくことにする。

○この中納言は、かやうにえさりがたきことの折々ばかり歩きたまひて、いといにしへのやうに、まじろひたまふことはなかり

けるに、入道殿の土御門殿にて御遊びあるに、「かやうのことに、権中納言のなきこそ、なほさうざうしけれ」とのたまはせて、わざと御消息聞こえさせたまふほど、杯あまた度になりて、人々乱れたまひて、紐おしやりてさぶらはるるに、この中納言まゐりたまへれば、うるはしくなりて、居直りなどせられければ、

入道殿の土御門殿で、遊宴が催された時、杯も多く重なって、人々は乱れてくる。そして、着物の紐を解いてくつろいだ格好をしている所へ、格式張った高貴な身分の中納言（隆家）殿が、着物もきちんとお召しになって、きりっとした態度でそのくだけた遊宴の場所においでになった。その場は急に改まり、居ずまいを正した雰囲気になる。くだけた、乱れた雰囲気から、一変して引き締まった雰囲気になる。そんな場合に、「うるはし」は用いられている。勿論、こういった堅苦しい雰囲気は、威厳のある、格式張った最高位の高尚な一人の男性によって作られる。

つまり、中納言が参上したことによって、堅苦しい、高尚な雰囲気になり、その座がきりっと引き締まる。したがって、「うるはし」は、威厳のある高尚な中納言という人物が関係していることになる。

この場合の「うるはし」の内容は、美的なものから少し離れ、生活態度に関係するものである。人々の行儀や態度を整えて、居ずまいを正している状態を指す。こういった内容から意味を考えて、「端正だ」と解するのがよさそうである。

次は仏教に関係のある例である。

○みづからの菩提を申すべからず、殿の御ためにもまた、法師なる御子のおはしまさぬが口惜しく、こと欠けさせたまへるやうなるに、「されば、やがて一度に僧正になしたてまつらむ」となむ仰せられけるとぞうけたまはるを、いかがはべらむ。うるはしき法服、宮々よりも奉らせたまひ、殿よりは麻の御衣奉るなるをば、あるまじきことに申させたまふなるをぞ、いみじく侘びさせたまひける。

道長の三男、顕信が出家をすると、ごきょうだいの宮様方から、「うるはしき法服」を贈られたとあり、僧の礼服に対して「うるはし」が用いられている。

こういった「うるはしき法服」というような用い方は、『源氏物語』にもみられる。

○一領は、六条の東の君にものしつけむ。うるはしき法服だちては、うたて見る目もけ疎かるべし。（「若菜下」）

この場合は、きっちり型にはまった尼衣を指すが、尚侍の君が尼になられての法衣、袈裟を含めて一式準備をしようとしている所に用いられている。「うたて見る目もけ疎かるべし」とあるから、そういった尼衣というのは、出家し道心堅く修行をする場合に着用するものであるから、平服を着て生活している者からすれば、なじめないものであろう。つまり、「うるはしき法服」とは、仏道修行堅固の精神の表象であるといえよう。

『源氏物語』には、次にも「うるはしき御法服」の用例がみられる。

○御容貌異にても、なまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき御法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。（「柏木」）

朱雀院は僧形をしているが、法服を一式きちんと身につけているのではなく、法皇らしからぬ墨染の衣を一般の僧侶と同じように着ているとある。換言すれば、法皇のお召物は普通、きちんとした一式の規定の法服を着用すべきことを指す。

『源氏物語』にもこのように、一式の規定の正式な法服に対して「うるはし」が用いられている例を認める。

さて、今みてきたと同じように、ここの場合における「うるはしき法服」も、一式の規定通り揃った正式なきちんとした法服をいう。そういった法服を、ごきょうだいの宮様方が仏心強固な顕信殿に贈るのである。こういったきちんと整った一式の法服を「うるはしき法服」というところから考えれば、この「うるはし」は「端正だ」と語釈するのがよいようである。

次の用例は装束着用に関する場合である。

○……にはかに、二十一日未時ばかり、起き居させたまひて、御冠し、掻練の御下襲、布袴をうるはしく装束かせたまひて、御手水召せば、何事にかと、関白殿をはじめたてまつりて殿ばらも思し召す。

道長は御冠を被り、掻練の下襲に布袴をつけて身形を正す。その布袴を着ける場合に「うるはし」は用いられているのであるが、高貴な身分の男性が着用する布袴をきちんと着けることをいう。したがって、「うるはし」を語釈すると、「端正だ」と解するのが最も適切であると思われる。乱れのない着用の仕方をいうが、『源氏物語』にも装束の着用に関して「うるはし」が用いられている個所がある。

○御尼額ひきつくろひ、うるはしき御小袿など奉り添へて、子ながら恥づかしげにおはする御人ざまなれば、まほならずぞ見えたてまつりたまふ。（「少女」）

大宮が尼削ぎの額髪を梳き整え、端正に御小袿などをお重ねになられる。女性の小袿の着用の仕方が、きちんと揃って乱れのないように着用する場合に用いられている。高貴な女性が身形を整えている際に「うるはし」は出現している。これは先の『大鏡』の例と同じであるといえる。つまり、「うるはし」は、男性の場合も、女性の場合も身形を整える場合に用いる言葉である。

次の用例は高貴な男性に用いられている。

○寛平の御孫なりとばかりは申しながら、人の御有様、有識におはしまして、いづれをも村上の帝ときめかし申させたまひしに、いま少し六条殿をば愛し申させたまへりけり。兄殿は、いとあまりうるはしく、公事よりほかのこと、他分には申させたまはで、ゆるぎたる所のおはしまさざりしなり。

村上天皇にご寵愛された兄弟について、弟君の方をいくぶんか愛し申されたのは、兄の殿が、あまりに「うるはしく」、朝廷の政務よりほかのことを、よけいには申されず、くつろいだ所がおありにならなかったからである、とある。こういった堅苦しい人となりに対して「うるはし」は用いられている。すなわち、よけいなことを

言わず、乱れたところがなく、きちんとしている人柄を「うるはし」と捉えている。したがって、「うるはし」の意味は「端正だ」と解するのが最もよい。

次の用例を検討していくことにする。

○八幡の放生会（はうじやうゑ）には、御馬奉らせたまひしを、御使などにも浄衣（じやうえ）をたまはせ、御みづからも清まらせたまひしかばにや、御前近き木に山鳩のかならず居て、引き出づる折に飛び立ちければ、かひありと、よろこび興ぜさせたまひけり。御心いとうるはしくおはします人の、信をいたさせたまひしかば、大菩薩のうけ申させたまへりけるにこそ。

石清水八幡宮の例祭の折のことである。「御心いとうるはしく」と、心の状態に対して「うるはし」が用いられているが、こういった例は、すでに先にも例をみてきたが、ここの場合は、「信をいたさせたまひしかば」とあるところから、「信心」というものが関係している。祭になって潔斎し、心身共に浄めている。そういった人が、厚く信仰なさったのであるから、「御心いとうるはしくおはします人」の「御心」の内容は、汚れのない「心」をいう。そういった「心」を「うるはし」と称讃しているのである。このように考察してくると、「うるはし」は「きれいだ」とか「清ら」と訳す方が、「端正だ」と訳すより、より適切なように思える。そして、「御心のたいそうきれいでいらっしゃる人が」と現代語訳出来る。結局、「うるはし」は清浄美として用いられているといえる。

次は最後の用例である。これを検討してみることにする。

○大臣二人は、左右の御車の筒うち押さへて立たせたまへり。東三条殿、一条左大臣殿よ。さて納言以下は、轅のこなたかなたにさぶらひたまふ。なかなかうるはしからむことの作法よりも、めでたくはべりしものかな。

祭の時、円融院がお出ましになって、大路がもの騒がしくなる。一同皆車から降りて、院の御前に伺候する。大臣二人、東三条殿（兼家）と一条の左大臣（雅信）は、お車の左右の轂（こしき）に手をかけて立っており、他の納言以下は轅のこなたかなたに控えていらっしゃる。こういった緊張した、堅苦しい雰囲気の中に「うるはし」は出現している。つまり、最高位の円融院という男性が関係していることになる。

本用例中の「うるはし」の意味は、文脈から考えて「端正だ」と解するのが最もよい。

以上、敢えて男性の作品である『大鏡』の「うるはし」について追究してみたく、本稿において用例を検討した結果、人物に関しては、すべて最高位の男性ばかりの人となり、心のきれさ、態度、気だて、容姿、高貴な生活様式、装束着用姿等に「うるはし」は用いられ、女性に対しては、「うるはし」は全然例をみることは出来なかった。人物の他は、屋根の裏板、御器、銀の食器、魚袋等人工的に立派に作り上げた物。法服等仏教に関係のある場合。それ等には、緊張した堅苦しい雰囲気が伴っている際、多く「うるはし」は出現する。そして、意味は「端正だ」・「端麗だ」・「きれいだ」・「見事だ」・「立派だ」・「格式のある」等解することが出来、多く誉

め言葉として用いられる。

注

（1）『大鏡』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。現代語訳、頭注等全般にわたって同書を参考にした。

（2）『源氏物語』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。